＜前回＞「宗教と科学」関係史２―適応の原理の射程―

（１）神の超越性と啓示

１．超越的な神をいかにして知りうるか？

・啓示の道：神から人間へ

創造（自然から自然的理性によって。原啓示）と救済（救済啓示）

・啓示の具体化とロゴス（神の言葉）→神学的認識論と聖書論・聖書解釈学

２．キリストのケノーシス

神の言葉＝三位一体の第２位格

「キリストは、神の身分でありながら、神の等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」(フィリピ 2.6-9)

３．神の人間的状況に対する適応。神-人としてのイエス、キリスト両性論。

神の下降と人間の上昇

（２）古代教父における適応の原理

４．武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辞――シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』

５．「ニシビスのエフライムは古代最高の賛美歌作者で、四世紀の最も重要な名教会著作家の一人である。」「シリア教会を代表する人物」(77)

「隠されたこと」「探求不可能性」「創造者と被造物との間の隔絶」

「明かされたこと」「探求可能性」「神はその愛故に自らを人間に明かそうとした」「自分をあるがままに啓示しなかった。人間が弱すぎて、それに耐えられなかったからである。そこで、人間の弱さに適応した姿を啓示した。これが像による適応である。また、人間の言葉でもって語った。」(85)

「「認識対象」からの働きかけなしに認識が成立不可能、ということ」(90)、「しかし、それでは神の側からの働きかけさえあれば、それだけでよいのだろうか。」今度は人間の側の自由意志が必要になる。」「神の語りかけに人間が自らの意志でもって応答することで初めて相互関係が成立する。」

「神は創造に際して下降していた」「全被造物が神の「象徴」」

「御父が像によって顕現した」「それは人間一人一人を尊重して、各々が自分の力に応じて把握できるようにするため」「旧約と新約の相違」(97)

「御父が人間の言葉で語った」

「ついに御子が受肉した」(98)

「人間もこうした神の下降によって初めて上昇した。また神の適応行為は全て、人間を上昇させるためだった。」

「人間の自由意志を最大働かせることができるようにするため」

「人間は上昇することによって初めて、神を語ることができるようになる」(99)

「人はその時々の自分にふさわしい象徴によって、その時々の自分にふさわしい神理解をしていくべきである。つまり神の適応を正しく理解し、それに応じて聖書を読むのである。」(102)

６．「クリュソストモス」

（３）宗教改革

（４）カルヴァンの適応の原理、そしてガリレオ裁判

16．カルヴァン『創世記注解』における「適応の原理」(principle of accommodation)

「モーセは、常識ある普通人の誰しもが教えられなくても理解できるような事柄を平

易な文体で記述した。しかし天文学者は、人間精神の賢明さが理解できる限りの事柄を苦労して探求する。しかしながら、この研究は神に見捨てられるべきものではなく、また、この科学を、自分の知らない事柄は何でも勝手に退けようとする血迷った人々がいるという理由で非難すべきではない。なぜならば、天文学は、喜びを与えるだけでなく、その知識は有用だからである。この学問が神の驚くべき知恵を示すということは否定できない。……モーセは、学識ある人々のみならず、無学で無教養な人々をも教える教師として定められているのであるから、こういうきめの粗い教え方をするところまで身を低めなければその役割を果たすことができなかったのである。」

（John Calvin, Commentaries on the First Book of Moses called Genesis（translated by the Rev. John King, M.A.）volume First, The Edinburgh Printing Company 1847, p.86）

17. では、どうしてガリレオ裁判は避けられなかったのか。カトリック教会はなぜ天動説に固執したのか。→プロテスタント的新解釈に対して、伝統的解釈を防衛する。

18. ガリレオ裁判を「科学と宗教」対立の事例とする解釈には無理があることが明らかであろう。むしろポイントは、カトリック教会（天動説を含む伝統的な聖書解釈に依拠する）とプロテスタント教会（信仰義認論を始め聖書の新解釈に依拠する）がガリレオ裁判の時代的背景であったことにある――ガリレオ裁判は 30 年戦争とまさに同時期である――。聖書のプロテスタント的新解釈に対して、伝統的な聖書解釈を防衛するというカトリック教会が置かれた状況は、聖書の新解釈に道を開く地動説に対して寛容な態度をとることを困難にしたのではないだろうか。

（５）啓蒙主義とハーマン

19. 川中子義勝『ハーマンの思想と生涯――十字架の愛言者［philologus crucis］』教文館。

20. 「その思想の深さと今日にまで及ぶ射程の大きさという点で、ハーマンは、カントに肩を並べる存在としてあげうる数少ない思想家の一人である。」「実存への注目、身体性と性の重視、言語と解釈の関係、世界の歴史性・言語性へ洞察などについて」（14）

「回心を経てハーマンは「へりくだり」の意義を正反対に、きわめて積極的なものに転じた。「神のへりくだり」は決してそのような啓示の〈周辺〉ではない。それは、むしろ神の行為の〈第一原理〉をなす。ハーマンは、「神のへりくだり」を神より生じる全ての出来事の核心と見ている。神は、創造において、受肉において、また聖書の記述において「へりくだる」。そのように「神のへりくだり」は三位一体的であり、その何れの位格においても「人間の言語へのへりくだり」である。」「「神のへりくだり」はどこまでも〈事実的〉であり〈言語的〉であり〈歴史的〉である。」（68）

（６）適応の原理から適応主義へ

21. イエズス会の宣教方針

高橋勝幸「A・ヴァリニャーノの適応主義の現代的意義」

（『アジア・キリスト教・多元性』第14号、2016年、133-147 頁）

「２、ヴァリニャーノの適応主義

②適応主義について

適応主義とは、布教地諸国民の人種、言語、民族、文化、社会、道徳、心理、宗教などの特異性を考慮し、人間性という共通の遺産を反映する各文化の健全で有効かつ優れた価値を認め、保存し、高めて利用するよう、出来る限り最大の理解を持って宣布することであり、ヴァリニャーノはザビエルの方針を継承して、適応主義を取っている。

22. 「適応主義」「適応の原理」。

神が世界へ、人間へ。人間がほかの人間へ。焦点としての、言語・書物。

10．「宗教と科学」関係史３
――ニュートン主義の自然神学――

＜「科学と宗教」の関係史のアウトライン＞

未分化／調和　／分離・分裂／対立／無関係／新たな関係へ
分化／区別（専門化）／緊張

古代　中世　近代初頭　啓蒙・19 世紀　20 世紀　21 世紀
ニュートン　ダーウィン

（1）科学革命とキリスト教

1．マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。

2．穏健な王制・国教会体制を擁護するという機能を有するいわばイデオロギーとしての科学。ニュートンとニュートン主義者は、最新の科学的知見（新科学）によって、無神論的思想傾向を含む論敵（右と左の）たちを合理的に論駁することを目指した。

（2）ニュートンとニュートン主義の自然神学

3．1970 年代以降・ニュートン研究の進展　→　ニュートンの知的世界の全貌
自然科学／自然哲学／自然神学／歴史神学／聖書解釈
The Newton Project（http://www.newtonproject.ic.ac.uk/index.html）

4．17 世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること（＝宗教的業）であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。
　新しい科学的知識は、伝統的世界観への批判を通じて伝統的なキリスト教への批判として機能できただけでなく（理神論、唯物論、無神論）、この同じ新科学によるキリスト教の擁護論（＝ニュートン主義）も可能であった。

5．「この至高の存在者は、宇宙霊魂(anima mundi)としてではなく万物の主(universorum dominus)としてあらゆる事物を統治する。そしてその支配のゆえに、主なる神(dominusdeus)、パントクラトールと呼ばれるのが常である。というのも、神とは相対的な呼び名であって、それは僕(servus)に関連しているからである。そして神性とは、神を宇宙霊魂とする者が夢想するような、神の支配が神自身の身体におよぶことではなく、僕におよぶことだからである。」（『プリンキピア』総注）

6．『プリンキピア』の神学
①パントクラトールあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配の強調
②無神論論駁のための神の存在論証
「この太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系は知性的で力ある存在の思慮と支配から発した以外には考えることができない。」（ibid., p.760）
　伝統的な自然神学における「意図（デザイン）からの神の存在論証」
③自然哲学とその神学的根拠
　自然哲学的前提は、さらにその根拠を知性的で力ある神の支配にもつのである。

7．二つの自然哲学：機械論的と錬金術的。錬金術者ニュートン。
　機械論的自然哲学：物体、もの。受動的自然（外力なしに運動状態は変化しない）
　錬金術的自然哲学：生命、物質。能動的自然

8．ニュートンの歴史研究とキリスト教史・聖書解釈
近代は、科学がイデオロギーとしての機能を発揮するようになった時代
伝統的宗教を弁護するために科学

９．主なる神の支配とその秩序（自然と歴史の全体）
↓
知的巨人ニュートンの思想世界
自然研究：数学・物理学（『プリンキピア』）→近代科学、機械論的世界観
重力・光学
物質論、錬金術（アニミズム的世界観）
歴史研究：聖書解釈
古代のキリスト教思想研究
古代年代記研究
10.「神の支配」による諸領域の統合、無神論を論駁するための科学
イデオロギーとしての自然神学・自然科学。
11．デザイン神学(Design Theology)
1）世界における見事な秩序・法則
2）偶然ではない
3）デザイナーとしての神の存在
12．ボイル講演：ニュートンの弟子たち（ベントリー、デラム、クラークら）の活躍。
↓
イギリス自然神学の伝統
13．イギリスの社会システムをいかにソフトランディングさせるかという問題
絶対王政と表裏一体の国教会
穏健な国教会（広教主義）・穏健なピューリタン：ニュートン主義
ラディカルな反国教会主義・共和制：新しい科学に基づく唯物論

（３）啓蒙主義と聖俗革命

１．西洋の「宗教と科学」関係論は、18 世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。
村上陽一郎は、これを聖俗革命と名付けた。
第一段階：知識を共有する人間の側の世俗化
知識の担い手：神の恩恵に照らされた特定の人間→すべての人間
第二段階：知識を位置付ける文脈（この中に科学と哲学の分化が含まれる）
「神―世界―人間」→「世界―人間」

２．ニュートンの場合に見たように、17 世紀における科学的知は、「神―世界―人間」の文脈において展開し、この文脈において、ニュートン科学は社会に浸透していった。こうして成立した「近代科学」は、次第にその元来の文脈から離れ、一つの自律的な活動として自立して行く。ここに啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）が誕生し、その後の近代的知のモデルとして機能することになる。「宗教と科学」の対立図式は、この延長線上に発生することになる。

３．代表例としてのラプラス
「われわれは、宇宙の現在の状態はそれに先立つ状態の結果であり、それ以後の状態の原因であると考えなければならない。ある知性が、与えられた時点におけて、自然を動かしているすべての力と自然を構成しているすべての存在物の各々の状況を知っているとし、さらにこれらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば、この知性は、同一の方程式のもとに宇宙のなかの最も大きな物体の運動も、また最も軽い原子の運動をも包摂せしめるであろう。この知性にとって不確かなものは何一つないであろうし、その目には未来も過去と同様に現存することであろう。人間の精神は、天文学に与えるこ

とができた完全さのうちに、この知性のささやかな素描を提示している。人間の精神が力学と幾何学とにおいて発見したものは、万有引力の発見と結合することによって、同じ解析的表現のもとで世界体系の過去と未来の状態を理解できるようにした。」（ラプラス、『確率の哲学的試論』、岩波文庫、10 頁）

４．注意点：科学の分野における相違あるいは時差

（４）ニュートン主義の諸相

・長尾伸一　『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』名古屋大学出版会、2001 年。

ジェイコブのニュートン主義解釈の批判的吟味

１．1760 年 4 月 30 日

「スコットランドの首都エディンバラで、自然科学、当時の表現では「自然哲学」に関心を持つ二五名青年たちが集まり、「ニュートン協会」という名前のクラブを創設した。」(1)

「ニュートン協会で描かれた「理想の科学者」ニュートンの像は、必ずしもイングランドでは充分に発展しなかったと言われるが、一八世紀スコットランドで展開した「キリスト教的科学者」の理念を導入した。」(26)

２．「ジェイコブの研究は実証手続き上の誤りと、科学革命と「資本主義」を単純に結びつける傾向のため厳しい批判を受けており、現在では支持できない。自然観と政治思想の間にはジェイコブが考えるような一対一対応はなく、それらと社会的利害の結びつきも単純ではない。しかしニュートンの理論と自然神学を結びつけた初期の「ニュートン主義」が、穏健な近代化を志向する政治的傾向とを帯びていることは、批判者たちも否定しない。」(15)

３．「ニュートン主義」の諸相

「啓蒙全体に及ぶニュートンの影響は「ニュートン主義」と概括されることが多い」(22)

「初期ニュートン主義」：ボイル・レクチャー、ライプニッツ＝クラーク論争、ニュートン周辺の広教会派神学者による神学的ニュートン主義

４．「ニュートン・プロジェクト」

『光学』の「分析と総合」の方法論

「ニュートンは物理学で自身が使用したと主張する方法を自然科学の全分野に適用し、その成果によって自然神学と倫理学を建設することを呼びかけている。」(27)、「一八世紀初頭にはこの思想に従って、ボイル・レクチャーに参加したサミュエル・クラークやリチャード・ベントリーたちは、ニュートンの自然研究の成果を使って、科学的にも宗教的にも「正しい」神学を建設しようとした。」(27-28)

「「新しい科学」の学説によって道徳哲学の全体を再構築するというプロジェクトにはるかに真剣に取り組んだのは、キリスト教的科学者の思想を体現しようとしたスコットランド人たちだった。彼らはニュートンの学問的方法をこの領域に持ち込むことによって、それを実現しようとした。そのためスコットランドの初期ニュートン主義は、物理学や数学というよりも、むしろ倫理や政治学などの領域への拡大を特徴とする。じじつランケニアン・クラブに始まるスコットランド哲学の形成は、クラークの自然神学や、これに対するバークリの批判を検討することから始まったのだった。」(28)

（５）ニュートン主義の自然神学と生命論

１．「『ボイル・レクチェーズ』とは、ニュートンの先輩格であたるロイヤル・ソサイエティの指導的なクリスチャン・ヴァーテュオーソ(キリスト教徒科学者)ロバート・ボイルが、一六九一年十二月三十日の死に先立ち、年五〇ポンドの基金を遺贈したことによって

行われるようになった一連の記念講演のことである。その主要目的は、『悪名高き不信心者、つまり無神論者・理神論者・ユダヤ教徒・マホメット教徒に反対して、キリスト教徒間の論争には及ぶことなく、キリスト教の正当性を立証するために、年に八回の講話を行うこと』であった。そのために基金運用理事会が設けられ、この理事会が年毎の講演者を決めることになった。注目すべきは、この連続講演者の中に、ニュートンの思想を受けた若きニュートン主義者が幾人も選ばれたことである。」（佐々木力、2000（1992）、295）

２．リチャード・ベントリー『世界の起源と構造からの無神論論駁』

「人間本性の価値に過度の評価を与えることなしに、我々は有徳で宗教的な人間の魂が太陽やその惑星や世界のすべての星よりも大きな価値があり卓越性を有することを肯定できるかもしれない。」（Bently, 1693, 356）

「天体がこのようなすばらしい物体の力ある制作者そして統治者という偉大な観念とそれに対する崇拝とを我々の内に生み出し、我々の心を刺激してその存在者に対する敬愛と讃美へと高めるということを、もし諸君が語るとすれば、諸君はまさに真実かつ適切に語っているのである。」（ibid., p.357）

３.「我々は次のように合理的に結論づけることができるであろう。つまり、現在の組織（世界システムの）は物質的原因の必然性や想像上の偶然という目的のない混乱から生じたものではなく、知性的で善なる存在者から生じたのであり、この存在者は現在の組織を選択と意図（design）によって特定の仕方で形成したのである。」（ibid., p.361）

４．ベントリーの自然神学：その後の近代イギリスの自然神学によってその方向性を示す自然神学がニュートンの自然哲学（『プリンキピア』）とキリスト教信仰との一致という確信に支えられていたことは、重要な意味を持っている。自然神学の説得力とは、新しい科学によって神の創造した世界秩序が発見されるという信念、あるいはそのように考えることの合理性への確信に基づいている。自然神学がベントリーが行ったようにニュートン主義として出発したことは、この信念あるいは確信が天文学、物理学のその後の展開過程においてその信憑性が問われねばならなくなることを意味する。

第３回(5 月 2 日)、第４回（6 月 6 日)、第５回（9 月 5 日）の講演『人体の構造と起源からの無神論論駁』：人体の構造に基づくデザイン論。

（６）自然神学の生命論－レイの自然神学－

５.「ニュートン的体系は多くの者にとって、世界が自己支持的な機構であり、その日々の働きのためには、神的支配あるいは維持を必要としないことを示唆しているように見えた。18 世紀の末までに、多くの人々にとって、ニュートンの体系は信仰よりも無神論や不可知論に導くように思われた。これは、ラプラスの『天体力学論考』── 宇宙論において事実上神（説明的仮説あるいは活動的な保持者として）の必要性を排除した ── と、詩人ウイリアム・ブレイクの著作 ── ニュートン的世界観がしばしばサタンと同一視されている ── との双方に反映していると見ることができる。」（McGrath,1998, 68）

６．レイ『創造のみ業に顕れた神の知恵』(1691)

「同書はそれまでの自然神学書の集大成であった。レイ自身の豊富な自然史研究を背景にしたデザイン論は説得力に富んでおり、同書はその後の自然神学書の模範となった。しかし元にしたモアの著書に引きずられて内容構成が錯綜しており、改版による大幅な加筆がそれを増大している。そのため一八世紀にはデラムの『自然神学』の方が多く読まれ、レイの思想は同書を通じて広まっていった。リンネもデラムの『自然神学』のスウェーデン語訳を読んで自然史の宗教上の意義を確信したのである。デラムはレイと親しく、レイの遺稿を整理したのもデラムであった。」（松永、1996、43）

７．レイの自然神学の意義と方法

「神性の信念はすべての宗教 ── 宗教とは敬虔に神を礼拝すること、あるいは神に仕えそして礼拝するという心の傾向性に他ならない ── の基盤である。なぜなら、神へと来る者は神が存在することを信じなければならないからである。この主要な論点を十分な説得性をもって確固たる仕方で解決し確立することは、きわめて重要な事柄である。さて、これは自然の光と創造のみ業とから引き出された論証によって論証されねばならない。……自然の光によって、人間は神性の存在を十分に確信するのである。実にこの根本的真理についての超自然的論証は存在しているが、しかし、それはすべての人間あるいは時代に共通ではなく、無神論的人間によって難癖を付けられ除外されがちなのである。」（Ray, 1691, iv-v）

８．理論的に武装した無神論者を合理的に（自然の光からの論証にとって）論駁し、キリスト教的宗教の基盤である神の存在を説得的に論証すること。もちろん、こうした自然神学における合理的論証は、聖書に与えられた神の啓示と矛盾するものではなく、聖書も自然神学も、こうした神の御業の讃美において同じ目的を有しているのである。「恒星がかくも夥しい数の太陽であるというこの仮説は神の偉大さと荘厳さによりかなっているように思われる。」（ibid., 3）

９．論駁すべき三つの仮説（Hypotheses）── 「いかなる卓越した非物質的な行為者の干渉や助力なしに、物質について機械的論仮説によって宇宙の形成を説明しようと企てる」（ibid., 11）── として、アリストテレスの学説、原子論（エピクロスあるいはデモクリトス）、デカルトの機械論の非合理性を順次論じてゆく。

10．デカルト説（ibid., 20-40）。モア、カドワース、そしてニュートンの反デカルト主義
「自然の中には、機械的力の作用を超えていたり、あるいはそれに反しているため、機械的力の作用によっては、目的因と何らかの生命原理なしには解き得ない多くの現象が存在する。例としては、重力や物体への落下の傾向性が挙げられる。」（ibid., 26）

11．「わたしは、動物を単なる機械というよりはむしろ、低い程度の理性が与えられていると考えるべきである」（ibid., 38）。

12．議論の概略、まず天体から地球へ（天から地へ）と進められ、次に生命の世界へ。
1. 天体（45-51）　2. 地上の生命のない単純な物体（52-63）：火、空気、水、地
3. 大気現象（63-66）：雨、風　4. 生命のない複合的物質（67-73）：石、金属
5. 野菜あるいは植物（74-86）
6. 感覚的魂を与えられた物体、すなわち動物（86-134）：鳥、魚、…
7.被造物からとくに選ばれた二つの考察対象：
　全体としての地球（134-150）、人間の身体
8. 人間の身体（151-223）：他の生物の場合と比較しつつ。
　直立姿勢（151-169）、目（169-185）、耳（185-187）、
　歯・舌・気管・心臓・手・骨・筋肉（187-223）
9. 道徳・宗教（身体の解明に基づく実践的な推論＝人間論）（223-249）

13．レイの議論のポイント
①レイの自然神学は、最初に確認した無神論的な仮説の取り扱いからもわかるように、基本的な枠組みはベントリーと同じであって、その意味でニュートン主義の自然神学に属するものと言える。また、天体や生命のない被造物にも一定の頁が割かれており、宇宙の全体から人間へという議論の枠組みが確認できる。
②しかし、ベントリーと比べてわかるように、レイでは、記述の大きな部分を使って、生命体、とくに人間が扱われており、レイの関心が天体や無生物ではなく、むしろ、自然史研究が問題にする生きた生命体や人体であることは疑いもない。無神論的な仮説を論駁する場合も、基本的には先行する諸研究（カドワース、ボイルなど）を参照する程度にと

どめた議論であり、レイの関心がニュートン的な自然哲学とは異なったところにあったことを示唆しているように思われる。我々はレイにおいて、その後のペイリーに至る自然神学の発展の方向性、つまり神のデザインを論じる主要な場の移行の発端を確認することができるのである。

③研究者も指摘するように、レイの議論においては、人間の身体について、とくに目と視覚との分析が詳細になされている点に特徴がある。もちろん、人間の目の仕掛け(contrivance)の完全さや巧みさを論じるということの目的も、「我々の身体の完全さと完璧さに対して全能の神に感謝」(ibid., p.223)することにあったことは言うまでもないであろう。

④レイの自然神学は後の自然史研究に大きな寄与を与えたものであるが、しかし、それは倫理学や宗教論、あるいはそれらに基づく人間論への展開を含むものであった。レイは、「人間の身体に関する言述から、三つの実践的推論を行おう」(ibid.,)と述べているが、これは人間の身体の科学的分析から道徳と宗教へ踏む込むものであり、自然神学がまさに「神学」としての性格あるいは問題意識を有するものであることをよく示していると思われる。

（7）自然神学の生命論－ペイリーの自然神学－

14. ペイリーの『自然神学』: ニュートン主義の自然神学の発展の到達点あるいは集大成

「一九世紀に入ると、デラムに代わって一八〇二年に刊行されたペイリーの『自然神学』が自然神学の標準的な教科書となった。……一九世紀前半、イギリスの科学者の大半はペイリーの信奉者であった。ダーウィンの進化論もペイリーの自然神学を土台として生まれてきたのである。ペイリーは独創的な研究者ではなく、教科書の執筆者として優れた能力を持っていた。ペイリーの主要な著書には『自然神学』のほかに、一七八五年刊行の『道徳・政治哲学の原理』と一七九四年刊行の『キリスト教証権論』があるが、いずれも教科書として高い評価を得ていた。」（松永、1996、47-48）

15. デザインを論じる場の移行

「天文学についてのわたしの意見は常に次のようなものである。すなわち、わたしは、天文学は知性的な創造者の作用を証明するのに最適の手段ではなく、またこれが証明された場合には、天文学は、他のあらゆる諸科学以上に神の働きの壮大さを示すと考える。一度説得された精神を、天文学は他のどんな学科が与えるものよりも、もっと卓越した神性の見方へと引き上げるのである。しかし、天文学は他のいくつかの学科と同様に、論証という目的にはあまり適していない。我々は、天体の構成を吟味するための手段を欠いているのである。天体のきわめて単純な見かけが、吟味の手段にとって不利になっているのである。我々が見るのは、明るい点、輝く領域、そしてそれらを照らす光を反射する天空の相にすぎない。さて、我々は諸部分の関係、傾向、対応からデザインを推論する。それゆえ、この種類の論証にふさわしいテーマを提示するには、一定程度の複雑さが必要になる。しかし、天体は、おそらく土星の輪の場合を例外として、諸部分から複合されたものとしては我々の観察に現れないのである。」（ibid., 263-264）

デザイン神学：デザインは一定以上の複雑度を有する事象における秩序を必要とする。

16. 17 世紀のニュートン主義と 19 世紀初頭のペイリーとの歴史的状況の相違、とくに天文学や物理学をめぐる知的状況の変化。啓蒙主義。村上陽一郎の「聖俗革命」。

「この革命には、大雑把に言って二つの段階がある。その第一は、知識を共有する人間の側の世俗化がそれであった。神の恩寵に照らされた人間だけが知識を担い得る、という原理から、すべての人間が等しく知識を担い得る、という原理への転換である。F・

ベーコンに、その最も典型的な発想を見ることができる。第二の段階は、知識の位置づけのための文脈の転換であった。神－自然－人間という文脈から自然－人間という文脈への変化がそれである。その変化のなかで、科学と哲学とが、それぞれに独立するというプロセスが付随する。」（村上、1976、25）

17. 「この聖俗革命の二段階が、ある時期を区切って、明確な形で起こっている」（ibid.）わけではない。しかし、まさに「大雑把に言って」、「一六・一七世紀に起った知の世界における革命を、理論上の革命とするならば、一八・一九世紀に起ったそれは、各科学理論を支える形而上学的な枠組みの革命であった」（ibid., 26)。
18. 諸科学における聖俗革命の進み方の多様性

＜参考文献＞

１．芦名定道　『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房。
２．伊東俊太郎　『近代科学の源流』中央公論社、『一二世紀ルネサンス』岩波書店。
３．佐々木力　『近代学問理念の誕生』岩波書店、2000(1992)年。
４．フランク・Ｅ．マニュエル　『ニュートンの宗教』法政大学出版局。
５．ウェストホール　『アイザック・ニュートン I、II』平凡社。
６．河辺六男編　『ニュートン』中央公論社。
７．長尾伸一　『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』名古屋大学出版会、2001 年。
８．村上陽一郎　『近代科学と聖俗革命』新曜社、1976 年。
９．田中正司　『アダム・スミスの自然神学』御茶の水書房　1993 年
10. 田中秀夫　『スコットランド啓蒙思想史研究』名古屋大学出版会　1991 年
11. 塚田理　『イングランドの宗教』教文館　2004 年
12. Bentley, Richard : A Confutation of Atheism from the Origin and Frame of the World., 1693 in: I. Bernard Cohen（ed.）, *Isaac Newton's Papers & Letters on Natural Philosophy and related documents*, Harvard Univ. Press, 1958.
13. Jacob, Margaret C. :*The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*, Gordon and Breach,1976. （マーガレット・ジェイコブ『ニュートン主義とイギリス革命』学術書房。）
14. Lindberg, David C. and Numbers, Ronald L.（eds.）, *God & Nature. Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, University of California Press,1986.
15. Livingstone, David N., Re-placing Darwinism and Christianity, in: David C. Lindberg and Ronald L. Numbers（eds.）, *When Science & Christinity Meet*, The University of Chicago Press, 2003.
16. McGrath, Alister E., *The Foundations of Dialogue in Science & Religion*, Blackwell, 1998. , *Science & Religion. An Introduction*, Blackwell, 1999.（稲垣久和他訳『科学と宗教』教文館）
17. Ray, John :*The Wisdom of God manifested in the Works of the Creation*（1691）,Georg Olms Verlag, 1974.
18. Paley, William: *Natural Theology*（1802）, in: The Works of William Paley, Thoemmes Press,1998.